

森田安一著

## 『ルターの首引き猫』

渡邊 伸

本書は、宗教改革思想の伝播を絵画の検討を通じて明らかにしようとする試みである。宗教改革はなぜ広範な運動となりえたのか。この問題のメディアの面からの考察としては、従来活版印刷術による出版物の意義が重視されてきた。しかし、当時の印刷物はむしろ朗読され、見られるものではなかったか。一般の民衆にとって重要な情報伝達の手段は、視覚によるものではなかったか。このような観点から、木版画つきのパンフレットを検討されたものである。以下、順に概要を紹介していこう。

### 第一章 歴史のなかの宗教改革

まず前提として、宗教改革の開始期の情況が簡略に紹介される。贖宥状の販売の問題と、ルターによる『九五箇条の提題』・宗教改革三大文書の公刊に至る経過が説明される。続いて人文主義者エラスムスについて、彼の活動が当時、宗教改革との関連においてとらえられていたことを中心に、また近年重要性が明らかとなったチューリヒの改革者ツヴィングリについては、彼の独自性と人文主義との関連を中心に、紹介されている。

次に印刷術の影響力が取り上げられ、伝達者としての人文主義者のネットワークが考察される。しかし書籍生産・流布だけでは

改革理念の伝達に限界があった。識字率の低さのためである。宗教改革が民衆にまで浸透し広範な運動になりえたのは、別の手段の役割が大きかった。それは説教やビラ・パンフレットの朗読であり、また改革理念を視覚的に訴えた木版画などであると考えられる。そこでこれらの検討によって宗教改革運動の別の姿を明らかにする、と問題提起されている。

### 第二章『神の水車』

宗教改革の本質を端的に示すパンフレットとして一五二一年にチューリヒで出版されたパンフレット『神の水車』が紹介される。その特徴は成立事情がはっきりしている点にある。製作者はフェスリという俗人とツヴィングリである。そしてこのパンフレットの登場人物と図版の内容、成立の背景が解き明かされる。

まずパンフレットの登場人物、とくにエラスムスとルターが当時どのような立場をとっていたか、両者の関係がどう理解されていたかが調べられる。注目される指摘は、この図版の中央に位置し、エラスムスとルターが作ったパン（聖書）をカトリックの代表者に渡す人物がツヴィングリと推定されている点である。またカルストハンスという打穀し怪鳥を追っている農民が描かれているが、カルストハンスは改革運動で重要な位置をしめたことが指摘される。

水車のテーマは、中世末のドイツにみられた「神秘の水車」に与えられていたモチーフ、キリストの受肉、受難、聖体の形成を图示するものであった。そしてこのモチーフを利用して宗教改革の理念が伝えられたことが本文テキストの紹介から示される。さらに版元の検討から、相当の部数が流布しており、カルストハン

スが登場するこのパンフレットが農村に改革運動をひろげるのに役立ったと推測されている。

評者が気になった点は、図版の解説において、カトリックの聖職者の頭上に飛び、「破門、破門」と鳴く怪鳥の見方である(本書三九頁他掲載)。著者は、このパンフレットが制作された時期、ルターが破門されていたことを根拠として、怪鳥はルターに対して鳴いているとするゲトラーの見解を採用されている。しかしながら、単純に怪鳥はカトリック聖職者に向かって鳴いていると理解するスクリブナーらの見解もある。図版から見るかぎりでは、後者の見るように捉えた方が良いように思われる。

### 第三章 『真理の勝利』

次に『真理の勝利』というタイトルのパンフレットが取り上げられる。木版画は世俗的支配者の凱旋行進の構図に「キリストのエルサレム入城」の様子を連想させ、説得力をもってカトリックの敗北Ⅱ聖書主義の勝利を示すものとされる。さらにパンフレットがフッテンの死亡の翌年に作成された事実から、当時のフッテンの人気の高さと、彼とルターとが共闘していると訴えられていたことが指摘される。

人文主義者とルターの共闘のイメージは、この木版画の下敷きとなったフッテン自身のパンフレット『ロイヒリンの勝利』に掲載された木版画との関係からも考察され、『真理の勝利』の作者は、カトリックに対する人文主義者ロイヒリンの勝利と、カトリックに対するルターの勝利を二重写しにして説得力を持たせようとしたのだと推測される。したがって福音主義の勝利、カトリックの敗北を何重にも強調し、強力な宣伝効果を発揮したと評

価される。

人文主義者とルターの共闘については、フッテンとルターの関係からも考察されている。フッテンのルターに対する評価の変遷が書簡やパンフレット等の資料をもとに跡付けられ、宗教改革の帰趨が定まらなかつた一五二一年頃までは対カトリックで協調していたことが確認される。確かに両者が必ずしも一致しておらず、既に互いの見解の相違を意識していたことも私信から確認できる。しかし一般には両者は共闘者とみなされていた。したがって改革が定まった後から見た、宗教改革者対人文主義者、教会改革者対社会改革者といった対立的な図式では両者の関係は捉えられないと指摘される。

さらにフッテンの『対話集』の木版画、『キリスト教の自由の擁護者』というビラ、また「剣と筆による」改革者フッテンを描いたビラの検討からも、フッテンとルターの共闘というプロバガンダが行なわれていたことが明らかにされる。つまり、一五二一年までのカトリックとの闘争においては、ルターの真意はともかく、フッテンは戦術として共闘をめざし、多くの著述家や印刷業者もこれを望ましいとみていた。宗教改革の当初には人文主義運動と宗教改革運動を切り離して考えることはできない。木版画は改革運動を波及して考えることの不十分さ、その時点にたった解釈の必要性を示している、とされる。本書の主題の一つであり、きわめて説得力のある見解である。

ところで『真理の勝利』は長文のテキストを持っている。言うまでもなく、これを読め、さらにロイヒリン事件も知っていた人々に、この図版はメッセージを送っていたと考えられる。つま

りこのパンフレットは、具体的に読者として人文主義者を想定し、彼らに改革運動へ結集するよう求めるという意図をもったものであることは間違いないのであるが、それでは一般の民衆にはどれくらいの影響をもったのであろうか。ロイヒリオン事件の知名度などが検討されねばならないが、民衆へのアピール度という点で、本書で取り上げられている他のパンフレットとは少し趣を異にしているように思われる。

また『キリスト教の自由の擁護者』の図版について、『教会のバビロン捕囚』の表紙の図版と事実上同じと見てよい、とされているが、敵密には（鼻梁や壁が・衣の線からわかるように）同じではない。印刷業者による複製とみて間違いない。『教会のバビロン捕囚』は、シュトラースブルクでは一五二〇年に印刷業者シュットによってルターの肖像付きで刊行されている。本書でも指摘されているが、フッテンの『訴えと警告』を出版し『対話集』のラテン語・ドイツ語版を出版したのもシュットである。

さらに、本書で『対話集』の木版画はルターとフッテンの共闘を物語るとされているが、その版画はシュットによって他にも転用されている。図案の制作については依頼主である印刷業者の判断が働いたと考えられ、またその利用は依頼し買った印刷業者の自由であった。本書では仄めかされているだけであるが、これらのパンフレットによる宣伝には、紙代などの費用や検閲・処罰という出版のリスクも負って印刷し刊行した出版者の意志が大きなウェイトをもったと考えてよいのではないだろうか。

シュトラースブルクの例を調べてみれば、フッテンの著作の一七がこの町で出版されたが、一二をプリュス、シュットが刊行し

ている。両者とも人文主義者のサークルと深い関係を持ち、教会関係の印刷も請け負ってヨーロッパ各地に販路を持っていた大手の業者であり、いずれもフッテンを支援していた。また評者は現物を見ていないが、書誌によればシュットの刊行本にはキリスト教とドイツの解放者としてルターとフッテンを位置づけたものがあるのである。

#### 第四章『ルターの首引き猫』

『真理の勝利』の図柄には、動物頭の捕虜ルターに敵対したカトリック神学者たちが描かれている。こうした揶揄、批判の手法は民衆にアピールしたと考えられる。ここでは代表的な神学者たちが首を揃えて揶揄され、また民衆の遊戯を取り入れることで民衆に親近感をもたせている図版として、『ルターの首引き猫』というパンフレットの絵表紙が取り上げられる。

一種の一騎打ちの性格を持つ「首引き猫」という遊戯を、キリストの十字架を支えとするルターと、動物頭の神学者ら（山羊頭のエムザー、豚頭のエック、猫頭のムルナーなど、揶揄の由来も解き明かされ、偽善を攻撃するテキストの持つインパクトが示される）の応援を受けた教皇とが争う場面を描き、パンフレットはルターの勝利の確実さを訴えている。

残念ながら、このパンフレットについては、制作された場所や作者などは不明であるようで、背景などは考察することができないようである。

#### 第五章『ウィッテンベルクの鷲』

次に一枚刷りの木版画ビラが取り上げられる。まず『解放者ルター』と呼ばれているビラは一五二四年の製作で、絵に添えられ

たアルファベット記号とテキストを対照することで内容を理解できる按配となっている。この図版でも、動物頭のカトリック聖職者たちが登場し、神の言葉をないがしろにしている様子が描かれる。そしてルターが民衆を誤ったカトリックの教えから正しい教えへと導く。テキストについては、バーゼルでの宗教討論会に關して詳しく述べられていることが製作者との関連で注目されている。

次に『ルター敵対者の戯画』とよばれる、カトリック神学者を揶揄するパンフレットが取り上げられる。ここでは中央に教皇、左右四名の神学者が動物頭で描かれ、テキスト付きで揶揄されている。

この図の解説の中で気になった点を指摘しておく、図版のライオン頭の教皇はレオ十世であるが、彼は一五二一年に死亡している、この図の揶揄が意味を持つとしたら一五二〇年代の早い時期に描かれていたと考えねばならない、既に見てきたものが全で一五二四年のものであるから、それらに先行して作成された戯画と考えられる、とされている部分である（本書一九六頁）。

しかしこれは問題がある。というのも、一五二四年に作成された農民戦争関係のパンフレットにも教皇をレオ十世にしているものがあるからである。スクリーブナーは、当時の民衆の情報量からみて誰が教皇が正確に理解していなかったとしてもおかしくない、としている。この図版の場合も、教皇を動物に見たてて揶揄するの都合が良かったからレオ十世にしたという可能性がある。これが正しいとすると、一九八頁ではパンフレットのテキストにある教皇の発言部分が前述の『解放者ルター』の中の教皇の発

言と一致しているから、後者は前者を引用したとされているのであるが、二つのパンフレットはほぼ同時期に作成されたということになる。むしろこの時期に改革派のパンフレットが集中的に作成されたことを重視すべきではないだろうか。

続いて、カトリック神学者を動物そのものとして描いた木版画が取り上げられる。一五二三年にハンス・ザックスが発表した『ウィッテンベルクの驚』である。彼の経歴と活動が紹介され、表紙の木版画、アレゴリーを用いた詩とそれに続くアレゴリーの解説本文が、カトリック教会の貪欲・腐敗を批判しルターの教えを示していることが紹介される。パンフレットは、市当局が出版物に検閲の目を光らせていた地元ニュルンベルクではなく、バンベルクで印刷され、各地で翻刻されて大きな影響力を示したことが、また前出の『真理の勝利』にも影響を与えたとする指摘があると思われる。

評者には、ザックスの宗教改革活動が一五二三年から四年にかけてであることと併せて、これらのパンフレットの刊行時期が比較的短期に集中していることが注目される。また背景として検閲など統治権力が出版の鍵を握っていた点も見落とせない。

#### 第六章 カトリックの反撃

最後にカトリック側の木版画・印刷術による反撃の例として、ムルナーの活動について考察が行なわれている。彼はフランチェスコ会士で、宗教改革以前から神学・法学博士、風刺作家として活躍していた。また自らもカトリックの枠内で聖職者の批判を行っていた。しかし一五二〇年以降ルターへの批判を行なった。

改革派によるムルナーへの反論は、ルターのもの、地元シント

ラーズブルクで出されたなどが検討され、その結果ムルナーを猫に例えての擲論・攻撃は、地元が起源であり、一五二二年頃には普及したとされる。また『四人の異端の歴史(「事件」と解した方がこの場合は適切ではないだろうか)』という彼の著書が改革派によって骨抜胎換されて攻撃に使われた例は、同時にロイヒリン・フッテン・ルターらの「対カトリック闘争」が共闘と見られていたという前述の指摘も裏付けているとされている。

これに対してムルナーは、『ルター派の大阿呆について』を一五二二年一二月に出版し、反撃に出た。これは彼が猫に例えて擲論されたことを逆手に取り、ドイツ語で書いた風刺詩と、自らも猫頭で登場する木版画を、謝肉祭劇風に仕立ててルター派を攻撃したパンフレットである。順にその内容が検討される。

この中で、パンフレットに掲載された木版画の中に登場する、ブントシュエ(農民の靴で、中世末の農民蜂起の際に用いられたシンボルマーク)を盾に描いた騎士や福音の旗を翻した戦士の図に関する説明については、別の解釈も可能と思われる(本書二四五頁、二四七頁の図を参照)。本書では、これらの騎士たちはルター派パンフレットの作者を思い起こさせる、と評価されているのだが、図版の内容自体からは、さらに他の意図を読み取ることでできそうなのである。

図版に描かれた戦士たちは、二四五頁の図では拍車のついた甲冑を身に付け、ブントシュエを描いた楯、二股の杖のような槍を担いで豚に股がっている。背後には山上の城が描かれ、盗賊騎士を思わせる。二四七頁の図では、上等の袖のたっぷりした服に胴鎧、羽で飾りたてた帽子をつけ、髭を蓄え腰の剣に手をかけて威

嚇するポーズをとった戦士が、福音の文字を記した旗を翻す。これらの人物についてはランツクネヒト(傭兵)であるとする解釈があるのである(スクリーブナー)。

この見方は肯ぜられると思われるが、すると彼らがブントシュエや福音の印を帯びていることは(このパンフレット中の他の図版には「自由」を記した旗を持つ戦士の図版もある)、改革思想は危険なならず者たちの横行や、無法者の自由放任を許すものであり、蜂起を駆り立てるものだと当時の人々の心象に訴えようとしたもの、と考えられるだろう。著者も論じているように、ムルナーはルター改革要求が民衆の蜂起と結びつくことを危惧していた。したがってこれらの戦士については、単に改革派のパンフレットの作者を擲論するというだけでなく、以上のような積極的な宣伝の意図が読み取られるべきだろう。

また、このムルナーのパンフレットについては、木版画を多用し、ルター派全体の戯画化に成功しているが、しかし市参事会の発禁処分によって回収されただけでなく、保守的な姿勢自身が改革運動の流れのなかで受け入れられず、ルター派の大量のパンフレット攻勢の前に敗退した、と総括されている。

しかしながら、この都市の出版活動の研究によると、改革派による出版点数の推移は一五二二年以後にピークがあったとされている(クリスマン)。木版画の流布量については推測の域を出ないが、全体としてはほぼ同様の増減を示したと考えてよいだろう。本書で取り上げられたパンフレットも、多くがこの頃に作成されている。そうだとすれば、ムルナーによる訴えはルター派のパンフレット攻勢に圧倒されたというが、それ以外の要因によるところ

が大きいのではないだろうか。

つまりムルナーの批判は、改革派の宣伝を逆手に取ったものであるから、その揶揄は改革派の宣伝が普及しているほど効果は大きいはずである。ムルナー「猫」というイメージが既に広められていて、これを逆手に取った仕掛けが巧妙であるにも関わらず、改革派批判が効果を上げえなかったとすれば、単なる図版つきのパンフレットの力だけでは民衆へのアピールは不十分であったことを示すものではないか。

本書でも述べられているように、ムルナーのパンフレットは市当局の規制によって回収されてしまう。一方、改革派の出版、聖俗の説教者の活動については帝国勅令違反となることから、市当局は懸念してはいたが放置していたのである。先のニュルンベルクの事例を併せて考えると、こうした姿勢の持つ意味は大きい。

この町の出版業者は早くから改革文書の出版に携わっていた。評者が既に指摘したように、シュットらはフッテンの文書の印刷を引き受けていた。さらにシュットは、本書二三〇頁に述べられている『怪獣ムルナー』の図版をムルナー自身の著作に転用して批判している。また二三三頁に述べられている、同じくムルナーの著作の表紙を替えて出版し批判を行った出版者は、ヨハン・ブリュースである。シュットはブリュースの父の職房で働いていた経歴があるとされており、両著で図版を貸し借りしている例もある。彼らはこの町の人文主義サークルの一員であり、さらに市参事会・市長とも昵懇の関係にあった。このような人間関係が、改革思想の伝播において見落とされてはならないのである。

本書は、パンフレットや図版が詳細な総書きがなされたならば、いかに改革のメッセージが具体的・効果的に伝えられるかを、文字通り例示した優れた研究である。それだけに、逆に図版が十全な効果を発揮するには優れた解説者を必要としたことも示している。単に現在の目からは内容が理解しがたいという問題だけではない。

これらのパンフレットは、人文主義と宗教改革とが思想的に對立したという通説的理解が、当時の運動の中では違っていたことを明らかにしている。そして改革運動の大衆化への橋渡しをしたと評価されている。ただしそれらは、著者も指摘するように、メッセージを補強する役割を務めていた。つまり民衆に改革理念を伝える上では、まず聖俗の説教者たちが重要であった。またこれらの宣伝媒体自体も製作者たちの個人的な関係の上に成り立っていた。評者には、当時の情報の伝達が、マスではなく個人的なものであり、いかに「パーソナルな要素」に基づいていたかを推測させるものであるように思われるが、いかがであろうか。

もちろん、これは評者の瞥見ゆえの誤解によるものかもしれない。また本書の内容・主題を逸脱した感想めいたものを記すことになっただけで、本書の貴重な成果をわかりにくくした評となっているとすれば、御海容を願う次第である。まずは、宗教改革研究の新分野の優れた成果として、多くの方々の御一読を願いたい。

(B6版 二六〇頁十二四頁 一九九三年一月)

山川出版社 二六〇〇円)

(京都府立大学文学部助教授)